験は「カテモノ」と称し言い伝えられた。しかし本県では，口伝えだけでこれ等に関する書籍となったものは見当らない。

江戸時代の末に，長崎でオランダとの通商が行われるようになってから，オランダ商館にスウェーデンの医師 Thunberg が来た。日本で採集した植物について帰国後『Flora Japonica』(1784)を著し，日本植物に学名を与えた。この本はすぐには日本には伝わらず，48 年後来日した Siebold によって，はじめて日本にもたらされた。Siebold に教えを受けた者は少なくなかったが本県関係者では植物に関して教えを受けたものは見当らない。

江戸時代後期（嘉永年間）に会津藩校日新館医学寮では，師範の大山嘉蔵，つぎに杉原外之助，日下順蓊によって本草を講じたという，詳しくは伝わっていない。その頃用いられた『本草綱目』が残っている。

明治以前の本県の植物研究は従来の本草の域を脱しなかった。

明治以後

矢田部良吉(1855-1899)は，1876 年アメリカ合衆国ニューヨーク州コルネル大学の留学をおえて帰朝し，東京開成学校教授となり，1877 年東京大学理学部教授•植物園事務担任となってから，近代的な植物学が行われるようになった。矢田部は松村任三（1856-1924）と共に，日本各地に旅して植物採集をし，日本の植物相の解明につとめた。本県内では，1879 年 8 月飯豊山に採集した。その採品の一つ，イブキゼリは Maximowicz によって Carum holopetalum Maxim. (1886) と命名された（現在は北川政夫により Tilingia holopetala (Maxim.) Kitagawa コイブキゼリ）。また松村任三が磐梯山で採集したキクバクワガタの一変種は，後に牧野富太郎（1910 年）により Veronica schmidtiana Regel var. bandaiana Makino バンダイクワガタと命名され，同時に採集した巨大オタカラコウを基準標本として，後に中井猛之進（1944 年）はシズオタカラコウと命名した。

このころ植物研究者は矢田部を中心に集まり，1882 年東京植物学会(1932 年日本植物学会と改称）を創立した。その会の発起人の一人に会津出身の大沼宏平（1859-1927）がいる。大沼は外国語学校を卒業し，東京大学医学部に進み Hilgendorf や Doderlein などの生物学講義に感動して植物の研究を決意したという。郷里福島県の植物については，特に研究しなかったが，駒場の農科大学において植物の同定やドイツ語の教授をした。ドイツ語が堪能であったので，スイス国チューリッヒ大学教授植物学者 Schroter 一行やドイツ国 Kunth，ヤナギの専門家 Enander，植